

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

名前 王 曉白

張恨水(チャン・ヘンシュイ、ちょうこんすい、1895-1967)は中華民国期を代表するいわゆる大衆文学作家で、北京を舞台に多くのベストセラーを発表しており、日本の国語辞典にも「本名、張心遠。多くの大衆小説を発表。恋愛悲劇「啼笑姻縁」は多数映画化。」(『広辞苑』第6版)と記されているが、これまで日本における研究は寥々たるものであった。中国では1980年代に彼が再評価された後は、大量の論文・研究書が発表されてきたが、張と北京との関係に関しては主に北京ローカル色を指摘するに終始してきた

本論文は張作品中の北京イメージを、主にケヴィン・リンチ『都市のイメージ』の「認知地図」の方法を援用してパス、エッジ、ディストリクト、ノード、ランドマークの五要素に整理し、このイメージ形成と張自身の北京体験および近代化による北京の都市環境の変化との間の影響関係を考察するものである。

第一章「総合的北京イメージ」は、明清両王朝の都として紫禁城、皇城、京城(内城・外城)という三重の城壁を擁した計画都市が、民国初期の朱啓鈴主管による慎重な改造と、1933年以後の袁良市長の「遊覧区建設計画」に基づく古跡の整理修繕により、古都の風格を保ちつつ近代化される過程を整理している。第二章「北京を舞台とする張恨水小説における北京イメージ」は、民国期発表の張の小説13編に出現する場所・地名を整理して上記の五要素に分類し、イメージの出現頻度を調査して、張の北京認知地図を描き出した。

第三章「張恨水文学における都市の系譜」は、張が上海近代都市文化の成果(出版業、新聞業、原稿料制度)を享受する一方、上海に負のイメージを与えていた点、抗日戦争期の南京イメージで人心鼓舞を意図していた点、同じく抗戦期の重慶イメージを文字通りの「陪都(副首都)」的に描いた点を指摘している。第四章「張恨水による「新中国」の叙述」は、1949年の人民共和国成立後の張は、共産党の要請により同党イデオロギーに近接した創作をしたものの、小説『記者外伝』(1957-58)は旧作を書き直すことにより北京イメージを集大成したと論じている。

最終章「北京における南方人アイデンティティー」は、南方人の張が北京での長期滞在を経て北京への深い愛着を抱いたこと、人民共和国期には新中国公民という身分を持つに至る点が、彼の小説の男性主人公イメージから読み取れることを指摘している。

本論文は、張文学における北京認知地図を解明し、伝統を継承しつつ近代化された北京が古都イメージを獲得していく際に張の小説が果たした大きな役割を論じるなどの顕著な成果をあげている。文芸理論面での補強等の課題を残すものの、本審査委員会はその内容が博士(文学)の学位を授与するに十分な水準に達しているとの結論を得た。